

砂族

白石かずこ

砂族 * 著者白石かずこ * 一九八二年七月一〇日
初版第一刷発行 * 発行人鈴木一民発行所書肆山
田横浜市西区高島二一―二一八〇九電話〇
四五(四五三)三九五八/〇三(九八八)七四六七
* 印刷宝印刷イナバ巧芸社製本山製本所 * 一
〇九二―一〇五〇―三四二四 * 定価一六〇〇円

白石かずこ砂族書肆山田

目次
——
砂族

生靈 儀式

38 24

黄色い湖

22

砂族の系譜 手首の丘陵

10 8

青空の下に少年と葬送 44

蝶道 62

桜吹雪く、宇宙の川べりで

70

砂行 80

眼の国 92

砂時計 104
砂の民 106

砂
族

手首の丘陵

男は手をかき始めた。手首をかき始めた。すると手のひらや指や腕ではなく、手首にある丘陵をみた。

それは、一見、何ごともない、少し氣どったゆるやかな丘陵にみえ、若い力がみなぎっていた。それは手の国の人、腕の国の人たちが往き来する大いなる道であった。ある晴れやかな午後に、また朝に、手首の丘にたち、唄うものはヒバリでなければならぬ。

昨日、手首の丘から戻った。ここからは手首の丘は遙か、フレームにはいった一幅の画にみえる。がよくみると、手首が指先を踊らすように空にひろげてる下に積乱雲がみえ、遠くにはピラミッドすらもあり、高千穂から空を破り光りがこぼれ、天地創造はついこの間、数日前のようでもある。

これら一筆の手首から生まれた宇宙を名付けるものはない。名前はこれから生まれるであろう。描かれた手首が主神であるか、手首のさそった雲や光や丘陵の風たちが主であるか、知らないが、受けつがれていくものが、今、かき手にかわり、自力で動き始めているのだ。

地球のように、わたし、あるいは作品のように。

砂族の系譜

リバーサイドには川がない

一九一一年以来、リバーサイドの川は乾きっぱなしだ。一九八〇年夏、わたしは始めてリバーサイドに現れる。川が乾いて六九年目である。

わたしはリバーサイドが沙漠への入口であることを発見する。と、わたしの内側から急速に砂族というスピリットが活気づき、でていくではないか、沙漠にむかい。

リバーサイド、リバーサイドと呪文を唱え、急速に、砂族、愛すべき、あの乾いた砂粒でできたスピリットたちが、でていく、歩い

ていく、飛んでいく、沙漠にむかい。

どこにいてもわたしの思考は沙漠、砂のある方へむかう。乾いた土地、乾いた熱い空気、太陽さえ、カラカラにノドをやかれてしまふ土地にむかい、わたしの内なる砂族たちは急速に活気づき、リバーサイドに一滴も水がない事を発見するやいなや、快活に、口笛など吹き、踊りだし、裸足で沙漠にむかい、駆けだしていくのだ。

するとわたしは、どんどん埋もれる。わが砂族におおわれた、わたしの記憶はすでに遠く何万年をさかのぼる。

ここはキャリフォルニアのインディアン、ヤキ族たちの村落のある砂地か、それともサハラの沙漠か、オーストラリア中央部、ウルルの聖地の近くであるか、記憶さかのぼるほどにアイマイである。

おそらくわたし自身が太古になり、眠っているらしい。わたしはタイコの音で、幾度か呼びおこされるが、わたしはわたし自身が砂なる大地になり、眠っているので、容易にこの眠りからさめようとしない。

リバーサイドには川がない。ドライ・リバーサイド、一滴の水もない沙漠の入口であるナゾの土地よ。なぜ入口であるか、なぜ出口ではないのか、沙漠は入口にみちていて、どこにも出口はない。

沙漠とは、はいるところである

はいるものを、こばまぬところである

そして入口は、更に奥なる入口を呼ぶのだ

奥へ、奥へと

わたしの砂族なるスピリットは果敢である。果敢な戦士であるからして、沙漠にむかい、一旦砂かぎつけるとそれにむかつて疾走するが、それがなぜであるかなどわかるものか、それは狂気でも覚悟というものでもなく、本能なのである。戻っていくのである。

わたしの内側より本来の巣へむかい、野獣のように鳥や魚のように戻っていく。それら砂族なるスピリットのいっせいにはばたき走る音が、熱い午後には聴こえる。肉眼で

みえないがみえる。ポエジーより太い。遙かに太い。大きな川で

あるからには

川のかたちした幻影のパワーであるからには

*

数年前 サハラへ足を一步入れた途端 黄色いキナコより木目の
こまかい砂粒 たちまち巨大な砂壁となり空をおおい 太陽を隠し
た 太陽も地球も青空も 何もみえなかった黄色い砂塵の中に よ
うやく わたし自身が五千年前の方からスフィックスとなり おき
あがるのを見た わたしはわたしをみたのである 五千年の一瞬で
ある その関係はわからない スフィックスとわたしの間の謎は
とけないままサハラから東京へ戻ると わたしの思惟の内側は 黄
色い砂嵐がたえずたつまき それらは砂の言語となり わたしの寝
室や 詩の上に 時折 こぼれおちた

*

ナイル川を上へとのぼるほど太陽は近くなり アフリカは深く濃くなる

遂にアスワンで下エジプトの黄色い砂たちは完全にピンク 黒い岩肌はクロコダイルになり 大ナイルの海から顔を出すとピンクの砂たちとたわむれるのだ

太陽は死よりも熱く 言語たちは化石になり 人間たちは 沈黙の固い影となり 時折ピンクの砂の上をよぎった

この風景を思い出すたび わたしの内側ではピンクの砂が熱い声をあげ 鰐のように さわぐのである

*

太平洋中央に 黒い精霊の小さな島があり そこで是一年じゅう雨が降りつづけ 太陽をみるのは稀であった

三日三晩ふりつづける雨の中で わたしのみたものは何か 黒い岩たち 黒い森たち 黒い木たち 精霊たち 悪霊たち 霧たちの向う 突き出た黒い岩たちと海の間に帯状に光り走る砂浜である

黒い砂たちは雨と波とで眼を濡らしつづけ光らせつづけ言語を忘れていた わたしの内なる砂族たちは 内界で身をすりよせあいながら これをみた 視るという行為が 一体何であり得ようか

*

東京 地下鉄入口に入ろうとするとところでオレンジの一粒の砂に逢った それは早口でわたしの耳許を走り抜ける あのウワサというものに似ていた

わたしは蝶の収集家のように 今では砂たちの狩人だ というのも わたしの内側に いつのまにか砂族たちが住みつき 砂の王国というのを つくり始めているから

わたしは彼らの命ずるままに 一旦 砂の匂を嗅ぐと 急に全身活力に充ち 砂狩りにとでかけるのである

オレンジの砂もとめて 旅は南へ 南へとむかう

南半球大陸の中央部にオレンジの砂たちは住んでいた

ウルル またはウルルル これは砂語であり 呪文である 砂の